

## 20 世紀末の大学生における性行動と「性暴力」被害等の関連

### Sexual Behaviors and “Sexual Violence” among College Students at the End of 20<sup>th</sup> Century

小島 宏 (早稲田大学)

Hiroshi KOJIMA (Waseda University)

大沢真知子会員の『性暴力と男女不平等社会』(西日本出版社、2023 年)には、性暴力被害を受けた女性が不眠症になりやすいと書かれている。以前、「日欧性行動・意識・価値観比較調査」の個票データを分析した際に、14-18 歳時に不眠症の男性の初交が早く、性的に活発なことを示したが、性暴力に関連する設問が複数あるので大学生の性行動の「性暴力」被害等との関連を探ることにした。

同調査は 2000 年 11 月～2001 年 1 月に日本性科学情報センターによって全国各地の大学で実施された(有効ケース数 980、うち男子 370、女子 600、性別不詳 10)ものである(佐藤 2002)。本報告では各種初交・初性的行為タイミング等(①初交年齢、②12 歳以上初交年齢、③初交・初性的行為年齢)を目的変数とする比例ハザード分析と各種性行動(⑤過去 3 か月間の複数回性交、⑥複数相手との性交経験、⑦特定の相手以外との性交経験、⑧恋愛関係のない相手との性交経験を目的変数とする二項ロジット分析により、性暴力被害等との関連を分析する。説明(関連)変数としては⑦意志に反した性的行為、④12 歳以下の初交・初性的行為(13 歳未満のものは 12 歳で発生したこととする)、⑨自分・相手の初交事後同意である。性的行為には性交を含みうるため、目的変数と説明変数の事象発生が同一対象者で重なる場合もあるので、①～④(12 歳以上初交年齢と 12 歳以下性的行為)の組み合わせのように両方の事象発生の重なりの影響を低減することに努めた。⑤～⑧も同様であるが、事象経験年齢が必ずしもわからないため、⑤はで初交未経験者を除外しないことにした。なお、統制(関連)変数として小島(2022)のモデルのものを修正したものをを用いた。

目的変数の事象と説明変数の事象が同じケースがあるためか、各種初交タイミングについても各種性行動についても男女総数の分析結果では、⑤の過去 3 か月間の複数回性交(初交未経験者を含む)と⑦・④に有意な関連がないことを除き、有意な正の関連がある。過去 3 か月間では複数回の性交を経験した者が少ないであろうし、性被害等を受けた者も少ないため、有意な関連が見出せなかったのであろう。男女別にみても多くの場合、有意な正の関連がある。初交タイミング等については女性における④12 歳以上の初交年齢と 12 歳以下の性的行為の関連のみが有意でないが、12 歳以下で性的行為があった場合では 12 歳を初交年齢に設定しているためであろう。意志に反した性的行為については男性で⑦と⑧が有意な関連をもたないが、男性の場合は特定の相手や恋愛関係にない相手とは性交経験が少ないのであろう。12 歳以下の性的行為については男女とも経験者が少ないためか⑦特定の相手以外との性交を除き有意な正の関連をもたない。自分の初交事後同意については総数で⑤と弱い負の関連があり、相手の初交事後同意については総数と男性で負の関連がある。

結局、当時の法的な性的同意年齢の 13 歳未満での性的行為を 12 歳以上の事象発生と組み合わせるのが理論的にはもっとも良いようであるが、事象発生が少ない(申告が少ない)ため、必ずしも有意な関連がみられなかった。

#### 引用文献:

小島宏(2022)「新旧のマルサスの実践と他の生殖関連要因」『人口学研究』, 第 58 号, pp.1-12.

佐藤龍三郎(2002)「日欧大学生性行動比較調査の経緯と結果の概要」『先進諸国の少子化の動向と少子化対策に関する比較研究 厚生労働科学研究費平成 13 年度報告書』(主任研究者:小島 宏).